雅風会たより

第6号

目　次

◆　はじめに
◆　仏像彫刻作品展　- 2022年6月 -
◆　川村先生の作品から　- 古色技法 -
◆　栃木光得寺の大日如来
◆　仏像彫刻教室から　- 救世観音編 -
◆　あ・ら・か・る・と

2022年7月10日　編集・発行 仏像彫刻「雅風会」
埼玉県所沢市西狭山ヶ丘 2-2090
URL: http://www1.cts.ne.jp/~h-1butsu/

◆　はじめに

「雅風会たより」第６号発行の運びとなり、皆様のご厚情の賜物と心から御礼申し上げます。

新型コロナウィルスの感染拡大がやや落ち着いた３月のある日のこと、関東支部から作品展開催のお誘いがあり、６月半ばに「仏像彫刻作品展」を開催しました。梅雨時にも関わらず、予報より良い天気に恵まれ、会場は久しぶりに一堂に会した皆様の笑顔でいっぱいでした。

お互いの作品を見ながら、感心したり自分では気付かない点に気づかされたり・・・、作品展効果は抜群です。私自身も素晴らしい作品に触発され、出品作品を撤収する頃には、彫りたい気持ちがはやっていました。

作品展２日目に遠路ご来場くださり、一体一体の作品に温かいご指導を賜りました松久佳遊様、松久真や様には、この場を借りて心より御礼申し上げます。

皆様からお声がけいただいた雅風会への温かい励ましの言葉を胸に、気持ちを新たにしっかり歩んでまいりたいと思います。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。　　（岩場記）

◆　仏像彫刻作品展　－ 2022 年 6 月 －

６月半ば、宗教芸術院の二つの支部が協力して、「仏像彫刻作品展」を開催しました。久しぶりの作品展、会場にはコロナ禍で制限され続けた日々を払拭するかのように、力強く美しく心のこもった作品が並びました。

沢山の作品の中で、特に心に響いた作品のことを書かせていただきたいと思います。

それは、仏像彫刻を始めたばかりの方の作品です。この会場に力作を出品している誰もが昔仏像彫刻を始めた頃に味わった心躍る時間、無心に彫るということに出会った頃のことを、この作品が思い出させ、実感させてくれたのです。

地紋彫りで彫刻刀に親しみ、仏足で仏様のおみ足を識り、握り手でやさしく持物を握る、開き手でみ仏の慈愛にすくわれ、仏頭で仏様がぐっと身近になり、少しずつ全体像に近づいていく喜びは、思い起こせばその時にしか味わえない宝物のような時間だったのですね。作品から作者の集中力と純な気持ちが伝わってきます。

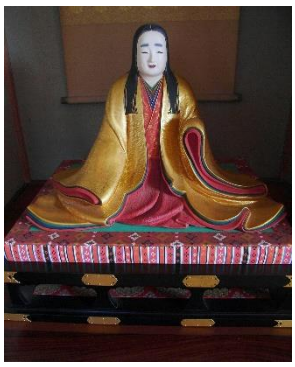
数年彫り続けると、仏像彫刻に向かう気持ちは一人一人異なっているかもしれません。「ただ一生懸命に彫っていたあの頃は良かったな」と言うことばは度々耳にしますが、中には仏像彫刻に真摯に向き合い、「楽しかったのは基本を習っていた頃だけ、後は（求める）仏を彫れず苦しいだけ」とおっしゃる方もいらっしゃいます。

ふと、朋琳先生の『京仏師六十年』にある言葉がよみがえりました。「・・自らの手で自らの仏性を彫って行く---　一人一仏が無限に広がっていくとき、宗派とか主義とかを超えたほんとうの祈り、ほんとうの宗教が実現するのではないか？」また、『仏像を彫る』の中では表現を変えられ、「私の奥にある私を仏像に投影すること、人の心にある美しい仏性を仏像として造形すること、また万人が拝める仏像を万人が持つこと、それらを理想的に実現させようというのが一人一仏・・」と。

いつも身近にある「一人一仏」ということばも、仏像を彫りながら、各々がいろいろな受け止め方をしているのかもしれません。

会場の素晴らしい作品に酔う一方で、松久宗琳佛所 宗教芸術院院長の松久佳遊様が指折り数えられ、「秋の展覧会まですぐやね!」と言われた時には、あまりの時間のなさに驚きました。今年も無事開催され、出品参加できますようにと祈らずにはいられません。　　（岩場記）

◆　川村先生の作品から　－ 古色技法 －



記念館には二体の古色で仕上げられた作品があります。「吉祥天立像」と「玉依姫命坐像」です。「吉祥天立像」は故川村先生の思い出の作品の筆頭に挙げられたもので、当時のことを「一番勇気がいったのは、古色仕上にするときでした。せっかくきれいに彩色されたものを汚していくわけですから、失敗したら元も子もないという思いでした。幸いに、宗琳先生から古色技法を伝授して頂き実践してみましたが、我ながら満足いく出来だったと自負しています。」と記されていました。「玉依姫命坐像」はその時以来の古色仕上げの挑戦とのことで、いろいろな草木や薬草を買い求められ、古色を出す準備をしておられました。この美しい彩色が一気に古色になるのかと思うと想像もできなく心配でしたが、京都展に出品された作品を見た生徒が「何十年も前の作品が物置から出てきたのかと思った」と驚いたほどの色合いになっていました。

先生が愛称で呼びこの上なく慈しんでおられたこのお像は、今も記念館の２階の床の間で、可愛らしいエクボと玉眼の深い瞳、静かな微笑みで訪れる人々を迎えてくださいます。

後年この作品は、『日本の神々事典』学習研究社 平成 20 年刊に掲載されました。（岩場記）

◆　栃木光得寺の大日如来（佐仲　努）

栃木県足利市光得寺の大日如来は、私の好きな仏の一つである。本体の座像には格別特異な点はないが、台座、光背の作りがユニークで面白い。例えば、台座の下返花（したかえりばな）の上に四頭の獅子が乗っていたり、蓮弁の一枚一枚に垂飾りがついていたり、月輪型の光背の二重円相光が特異な造りであったり、私があまり目にしたことがない特徴がいくつもある。ただ、浅学の私が知らなかっただけで、例に挙げたこれらの特徴は、他に例が全くないというものではないらしい。ともかくそれらも含めて、この仏全体のたたずまいが気に入っている。

光得寺さんに電話で拝観の可否をたずねると、管理上の関係で、国立博物館だかに保管を依頼しているので、お寺では見ることができないという。実物は結局見ることができなかったが、本体、台座、光背に至るまで詳しい資料を探し当て、図面作りができた。

なお、この仏は、お厨子に入っていることが判ったが、それは省略することとした。

また、写真では、獅子は四頭だったが、元々は八頭だったようなので、八頭にした。蓮弁の垂飾りは先端に付けるガラス玉をビーズで代用し、光背の二重円相の波形板金や外側の飾金具は木で作るなど、材料は違えても原型はあまり変えないよう心がけた。

この像を京都の展覧会に出したら、偶然同じ仏の像を宗教芸術院の柚山先生が出品しておられた。柚山像の素晴らしさに見とれ、これこそが仏の表現だと感動した。

それに比べると、私の作品は、仏もどきのお人形さんとでも云うべきか。

一緒に行った家内に「出すのが一年ずれていればよかったな」と云った。

◆　仏像彫刻教室から　－ 救世観音編（仏像彫刻のすすめ参照）－

初心の方は、地紋彫りから初めて仏足、握り手、開き手の形を、彫り進めてきました。彫刻刀の使い方に大分慣れてきたことと思います。いよいよ仏像「救世観音」に取り掛かります。

教科書の救世観音はデザインが簡素化されていて一見簡単そうに見えますが、完成した姿の左右対称の美しさを注意深く観察してしっかりと彫りましょう。

寸法は教科書（仏像彫刻のすすめ）通りの、幅２寸×厚さ１寸×高さ６寸５分、材質は適宜で良いのですが彫りやすさからもまた、完成した時の美しさからも桧材がお勧めです。角材の表面は鉋をかけて下図が書きやすいようにしておきます。教科書の絵（P118～P119）を参考にして材料に書き込んでいきますが、最初に正面および背面について左右対称を意識して狂いの無いように曲尺を使って正確に書き写していきます。

正面と背面の下図が書けましたら、ノコギリとノミを使って下図の線を残し気味に輪郭をとっていきます。側面については正面（背面）からの輪郭をとった後に、下図を書き入れます。正面と同時に側面の下図を書いても正面からの輪郭をとっていきますとせっかく書いた側面の下図が消えてしまいます。

これから先は教科書の P120～125 を順によく読んで参照しながら注意深く丁寧に彫り進めていきます。天衣のヒダの線は一刀彫の味が出るように、滑らかに流れるように途中で刀を止めないようにして一気に彫ります。仏像彫刻を始められた方はこれから益々楽しみが増えて来ることでしょう。（竹内記）

＊＊＊　あ・ら・か・る・と　＊＊＊

◆　賛助会会員の皆さまへ-令和4年度会員継続のお願い-

平素は雅風会の活動にご理解ご協力を賜り、御礼申し上げます。会員の皆様におかれましては、令和4年度（令和4年７月～令和5年６月）も引き続きご継続をいただけますよう、宜しくお願い申し上げます。※会費の宛先については、別紙をご参照ください。8月末日までにお納めくださいますよう、よろしくお願いいたします。

◆　「第59回仏教美術展」（宗教芸術院）開催のお知らせ

日時：令和4年11月4日（金）～11月6日（日）　※3日は会場準備

場所：京都文化会館

出品申込：研鑽会員および教室生徒の方の出品申し込みは、担当者または講師に、出品料を添えて８月末日までにお申し込みください。

賛助会員で出品ご希望の方や11月3日の作品搬入が無理な方は、竹内(090-9670-5328)までご相談ください。

◎　記念館での「新型コロナウィルスの感染注意」ご協力のお願い

記念館へ来館（見学）される時は、事前に記念館（tel:080-3360-4019）までご連絡をお願いいたします。また、ご来館時は、マスクの着用等感染防止対策にご理解ご協力を宜しくお願い申し上げます。

（第６号編集責任：岩場）

第７号は明年１月に発行の予定です。